

九鬼周造における「ぶし」の美と倫理

西原信彦（関西学院大学）

本発表の目的は、九鬼周造『「いき」の構造』や「日本的性格」などにおいて見受けられる「いき」や「意気地」を支える武士道精神の内実を明らかにすることにある。誤解を恐れずに言えば、これまでの研究では、九鬼の思想は実践的な側面か観照的（美的）な側面のいずれかから論じられてきたきらいがある。しかし、九鬼が求めた「倫理的であるとともに美的な」生き方にはその両方が備わっているはずである。さらに、『偶然性の問題』において現れる「根源的社会性」という語のもつ意味や、「遇うて空しく過ぐる勿れ」という言葉の真意を理解するためにも、武士道精神の源泉を明らかにすることが肝心であると考えられる。

これまでの九鬼研究では、偶然論や時間論に比して、九鬼の武士道理解についてはあまり論じられて来なかった。それは、純粹に我が国の歴史に依拠させることが困難なものであると考えられ、九鬼個人の思想を表明するものとしてのみ理解されてきたふしがあるからである。たしかに九鬼は日本的なものであるはずの「いき」を、西洋の思想、哲学に即して論じてしまっている。例えば九鬼は「いき」を「無目的な目的」や「無関心」等、カント美学における概念を換骨奪胎して考察している。また批判的な文脈においてではあるものの、武士道精神と、ニーチェに見られる騎士道精神との関連をあまりにも容易に認めてしまっている。本発表では以上のような点について言及し、九鬼が「いき」を論じるにあたって拠りどころとした思想を明らかにしたい。

さらに、近年の研究では、九鬼の思想を殊更に日本的なものとして取り扱うことの危険性が叫ばれている。たしかに九鬼の述べる道徳的理想主義を軽はずみに日本的なものとして考察し、それに満足することは九鬼の思想の理解をゆがめてしまうことになるかもしれない。しかし九鬼が「いき」を「歴史的民族的に規定された存在様態」とし、「わが民族存在の自己開示」として考察したことの意義は、単にそれが日本文化に固有のものであることを主張することにあるのではない。そうではなく、日本においてかつて存在した「武士」という存在者に、彼等がもっていた倫理的であると同時に美的な生き方の源流を見出し、それを復権させることにあったはずである。

また、九鬼が江戸時代の美徳である「いき」を、化政期の文化、思想によってのみ考察していることには一貫性はあるものの、同時にその文化の根源を探ることに自ら限界を設けてしまっている。それゆえ九鬼が目指した「いき」な生き方の存在理解を行うにあたって、江戸時代よりさらに古い時代にまで遡及し、「いき」とは一体いかなる存在者に宿るようなものであるかを検討する必要もある。

したがって、本発表の考察の手順は以下の通りとする。まず「いき」と「日本的性格」とがパラレルに理解出来ることを確認するため、それらを構成する概念の整理と分析を行う（第一章）。そして上記の概念と西洋哲学、思想との関連を考察したうえで、「意気地」の概念の有する問題点について論究する（第二章）。最後に、九鬼が言及することのなかった、江戸時代より以前の武士の起こり、在り様に関する視座を折口信夫「ごろつきの話」などから得る（第三章）ことで、九鬼が「いき」な存在者に見た「倫理的であるとともに美的な」生き方の理想の理解を深めたい。